

民国期中国における画家評価と「美術」制度の形成

九州大学人文科学府博士課程後期 武 夢茹

2000年に陳振濂が一国美術史としての中国近代美術史研究の限界を提唱して以来、日中や欧米の研究者によって交流史の観点から中国美術史研究が積み重ねられてきた。近年、国際シンポジウム「人とモノの『力学』—美術史における『評価』」（東京文化財研究所、2011年）を例に、東アジア画家の評価が域内における美術交流の中でどのように形成されてきたのかという課題が議論されている。同様の問題意識に基づいて、本発表では、1920年代の女性洋画家関紫蘭（1903 - 1986）の評価を形成した社会的背景について分析することで、近代中国における画家評価が日中美術交流の過程と密接に結びついていることを明らかにする。

発表ではまず、1927年の関紫蘭の日本滞在に着目し、マスメディアにおける画家の評価が二科展入選を機に高まったことを指摘する。折しも関紫蘭の二科展入選を前後として、上海では日本の官展や二科展に対する関心が高まっていた。関紫蘭の社会的評価が上海画壇における二科展受容とどのように関連していたかについて考察する。

次に、清末における欧州の万国博覧会への参加や、民国期に博物館美術館や展覧会制度が移入された経緯について概観する。とりわけ、近代中国における展覧会制度の確立において日本が果たした役割については、これまで1919年から天馬会が主催した展覧会で日本の官展に倣った審査制度が採用されたことや、1921年から開催された日華連合絵画展覧会、1929年の第一回全国美術展覧会で日本人画家による作品が参考作品として展示されるに至った経緯などについて明らかにされてきた。しかしながら、どのような固有の問題意識のもとに上海画壇で日本の美術展制度が移入されたのかについては十分に検討されていないように思われる。そこで発表では、1919年に石井柏亭のすすめで日本の美術展の視察を敢行した劉海粟（1896 - 1994）の活動に着目する。上海を訪れた石井柏亭が江蘇省教育会で行った講演や、彼の二科会設立運動の経験が、劉海粟によってどのように受け止められたのかについて分析し、劉海粟が日本の美術展制度を導入することで何を乗り越えようとしたのかについて考察する。

以上の考察を通して、1920年代のメディアにおける関紫蘭の評価が、劉海粟による二科展制度の受容をはじめとする、日本からの「美術」制度の受容と密接に結びついていたことを明らかにする。